

## ■ 書 評 ■

広田照幸 著

『陸軍将校の教育社会史—立身出世と天皇制—』

お茶の水女子大学 駒込 武

本書は、戦前期日本の陸軍将校の選抜と社会化のプロセスを分析した研究書であり、東京大学大学院教育学研究科に提出した学位論文に加筆・修正を加えたものである。天皇制イデオロギーを教え込む場としての学校と、立身出世による社会移動の手段としての学校という、二つの対照的なイメージを架橋することを目指したものとして著者は本研究を位置づけている。

構成は3部からなり、第I部では陸軍将校のリクルート基盤を分析し、第II部では、陸軍士官学校・幼年学校におけるイデオロギー教育の側面に着目して、生徒たちの意識構造を分析している。第III部では陸軍将校の生活の社会経済的側面と、一般の兵士や教員などの戦時体制の担い手諸集団の意識を検討している。結論として、天皇制イデオロギーの注入が徹底して図られたはずの陸軍士官学校・幼年学校においてすら、生徒の意識構造に即してみれば、立身出世のような私的欲望が天皇への献身と矛盾なく同居していたことを著者は指摘し、「滅私奉公」を説く公的イデオロギーが国民に教育を通じて内面化されたという説明図式を越える必要性を強調している。

「滅私奉公」ではなく、「活私奉公」こそが陸軍将校の意識構造であったという

結論には同意できる。客観的には矛盾・対立する価値観が当事者の意識においては矛盾なく同居することがあるということも重要な着眼点であろう。何よりも「教育社会学」研究の観点からすれば、従来からの立身出世主義研究の枠組みを天皇制研究という広大な土俵に接合した点に「新しさ」が見いだされるのだろう。

しかし、これを天皇制研究の側から見るとどうなるのだろうか。結論的なことをあらかじめ述べておけば、本書の結論に連なる内容がすでに「政治思想史研究」や「教育史研究」の中で指摘されてきているにもかかわらず、その内容をステレオタイプ化し、矮小化することで自らの研究の「新しさ」を標榜する結果になっていると評者は思う。以下、「教育史研究」の例に即して述べる。

著者は、「教育史研究」は、もっぱら天皇制イデオロギーの教え込みに焦点化してきたとして批判する。そうした「教育史研究」も確かに存在するだろう。しかし、そもそも「教育史研究」という言葉を主語にして研究動向を語ることに、どの程度意味があるのだろうか。佐藤秀夫らの研究に対しては著者も創見を認めているにしても、やはり「教育史研究」のフォローは不十分であり、その評価は特にアンフェアですらある。

たとえば、天皇制教育のとらえ方について。本書の序論では、「天皇制への妄信が国民を侵略戦争に駆り立てた」という久木幸男の文章をとりあげ、人々は「天皇制イデオロギーの教義を理解し、納得し」たから侵略戦争に協力したのだろうか、そうではないと批判している。ところが、引用部に先立って久木の書いた文章の中には、どこにも「理解」し「納得」したから協力したとは書かれていない。むしろ特に1930年代後半以降「理に従って説得するという方法は放棄された」ということが書かれている。また、久木は天皇制イデオロギーとは容易に「理解」や「納得」をえられないものであるからこそ、動揺と再編を繰り返したことを強調している。著者が「妄信」という言葉に勝手な内容を読み込んで、的外れな批判を展開しているというほかない。

本書の結論と重なる着眼点が、従来の研究で示されていることも付言しておこう。結論において、著者は、天皇制イデオロギーが民衆の支持の調達を可能にした要因として、「不敬事件」の例に見られるように「天皇への献身」というロジックの恣意的利用が可能だったことや、「対立する別の準拠価値を内面化する機会がほとんどなかった」ことを挙げている。重要な指摘である。しかし、だとすれば、小股憲明らによる「不敬事件」の研究において、「不敬」をいいたてる側の私的欲求が緻密に分析されていることを著者はふまえておくべきだろう。また、対立する準拠価値を内面化する機会がなぜどのように乏しくなったのか、という問題への洞察も求められる。

たとえば、久木幸男は、天皇制に対立する可能性をもつ価値体系としてのキリスト教や仏教に着目しながら、訓令12号が宗教系学校を天皇制にとって無害なものにしていった過程を分析している（『横浜国立大学教育紀要』第14～16集）。そのさいに政府が当初採った方策は、天皇制イデオロギーの「教え込み」でも端的な宗教教育の「禁止」でもなかった。宗教教育を従来通りつづける場合は予備将校任用資格を奪うという、まさに私的欲望に訴えた「脅し」であった。立身出世主義と天皇制教育のもたれあいの構造の中で、つまるところ何が失われたのか。久木はその一側面を教育制度構造の問題として解明しているのである。

本書で本来なされるべきだった作業は、こうしたマクロな構造（制度やイデオロギー）との関係でミクロな相互行為を分析し、位置づけていくことだったのではないか。それはもちろん、すべてをマクロなレベルに還元して説明することではない。天皇制を一つの準拠価値として受容していく際の「主体的な契機」は、時と場合に応じて異なるはずだからである。陸軍将校の意識構造は、その一つの事例として位置づくだろう。

なお、著者は「最も『無私の献身』を強調した教育の中においてすら」立身出世主義が浸透していたことを強調しているが、高等官に任官できる陸軍将校が「活私」の捷徑だったことは、当然ではないだろうか。むしろ重要なのは、将校と同じように戦死の可能性に直面しながら、彼らとは異なり、高額の遺族恩給を約束されていなかった一般の兵卒にとっ